

# まるやま遺跡

—本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V—

1998年  
兵庫県教育委員会

# まるやま遺跡

一本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V-

1998年  
兵庫県教育委員会

## 例　　言

1.本書は、兵庫県津名郡淡路町岩屋字丸山に位置する、まるやま遺跡丸山地点の発掘調査報告である。

2.発掘調査は、本州四国連絡道路(神戸・鳴門ルート)の建設工事に先立ち、平成2年～平成4年にかけて兵庫県教育委員会が実施した。

3.発掘調査の年度および担当者は下記のとおりである。

確認調査 平成2年度

主査 吉田 昇・技術職員 山本 誠

全面調査 平成4年度

主査 吉田 昇・研修員 三原慎吾(現職 兵庫県立鳴尾高等学校教諭)

4.本書の執筆分担は、本文目次に示している。

5.本書の編集は三原が担当した。編集にあたっては古谷章子の援助を受けた。また、山本・長演誠司の協力を得た。

6.本書に掲載した位置図(第2図)は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1を使用した。また、遺跡分布図(第1図)は建設省国土地理院発行の20万分の1を使用した。調査で使用した標高はTPを使用した。

また、本書で使用した座標は磁北である。

7.本書で使用した引用・参考文献は本文末に一括して記した。

8.現地での遺物の取り上げは、遺跡調査システム「カタタ」を使用し、使用に際しては、妙見山麓遺跡調査会にご助力を賜った。

9.本文中の挿図のうち、縄文時代草創期の遺物分布図は、(株)コンピューターシステム製の遺跡調査システム「サイトII」を使用して作成した。

10.発掘調査・整理にあたっては、下記の諸氏に御指導・ご助力をいただいた。(敬称略)

伊藤宏幸・川崎 保・佐藤良二・中川和哉・松藤和人・山口卓也(五十音順)

# 本文目次

第1章 歴史的環境 (三原慎吾) .....	1
第2章 調査の経緯 (三原)	
第1節 概要 .....	4
第2節 確認調査 .....	4
第3節 全面調査 .....	4
第4節 整理作業 .....	4
第3章 遺跡の立地と基本層序 (三原)	
第1節 遺跡の立地 .....	7
第2節 基本層序 .....	8
第4章 調査の結果	
第1節 遺跡の概要 (三原) .....	10
第2節 繩文時代草創期の調査 (三原) .....	10
第3節 その他の遺物 (長濱 誠司) .....	32
第5章 まとめ (三原) .....	34

# 第1章 歴史的環境

本州四国連絡道路(神戸・鳴門ルート)の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査により、淡路島の歴史に書き加えられるページは多い。本州四国連絡橋開通の発掘調査報告書でさまざまな歴史的環境は触れられるであろうから、ここではまるやま遺跡の時期に関連する遺跡を考え、当該時期のまるやま遺跡の位置づけをおこないたい。

## 【兵庫県下の縄文時代草創期の遺跡】

これまでの発掘調査の成果、表面探査などにより当該時期の遺跡の様子が明らかとなっている。ここではその概略をまとめる。

### 国領遺跡

遺跡は中国山地帯の東緑部氷上郡春日町国領にあり、竹田川の支流国領川に沿う扇状地形上に位置する。同遺跡では、約1500点の石器群が4ヶ所の石器集中部(ブロック)を形成して検出されたほか、7基の土坑も確認されている。石器群の組成は石鏃・有舌尖頭器・木葉形尖頭器・搔器・削器・快入搔器・鋸歯縁石器などからなる。石材は、付近で獲得できるチャートとサヌカイトからなるが、チャート製造物が大半を占め、サヌカイトは有舌尖頭器等3%に限られる。石器群の時期的位置づけは、土器の共伴がないことから困難が伴うが、陸繩文系土器後半期から神宮寺系押形文土器に至る時期が考えられている。

(兵庫県教育委員会 1990)

### 藤岡山遺跡

遺跡は、多紀郡篠山町に存在する。木葉型尖頭器とその先端部、他に、削器などが認められる。木葉形尖頭器はチャート製で、大形の部類に入るものである。木葉型尖頭器を御子柴・長者久保系石器群に特徴の大形木葉形尖頭器として捉え、同時期の所産とかんがえられている。(深井 1980)

### 伊府遺跡

遺跡は、城崎郡日高町に位置する。同遺跡からは石鏃・木葉形尖頭器・局部磨製石斧・磨製石斧・削器の出土を見ている。局部磨製石斧の出土が特筆される。石鏃の組成率が高く、削器に分類されたものに定型的なものが少ない。(深井 1980)

## 【淡路島島内の様子】(第1回)

淡路島を考えれば、表1のように、これまで以下の地点で有舌尖頭器の発掘・表面探査の報告がなされている。いずれも断片的な資料であるため、時期の特定などには困難が伴う。出土・探査された有舌尖頭器は、いずれもサヌカイト製である。北淡町舟木遺跡の例は、基部からゆるやかに内湾する舌部を持つ資料である(北淡町教育委員会 1994)。五色町中島遺跡の資料も、同様の特徴を有する(五色町教育委員会 1994)。洲本市真野谷遺跡の資料は、基部に返刺を有する(波毛 1985)。緑町安住寺遺跡では、早期の押形文土器が出土しているが、有舌尖頭器がこれに伴うものか否かは不明である。



第1図 繩文時代の遺跡

また、縄文時代の各期の遺跡としては、早期の北淡町堂の前遺跡、前期の洲本市武山遺跡があり、時代が下って後期には、淡路町ではナキリ遺跡や同遺跡近辺の給田遺跡・大川遺跡のような小規模な遺跡が多い。このほか、東浦町佃遺跡・西淡町谷可筋遺跡のほか、まるやま遺跡假田地点(未報告)では、時期の特定が難しいが、縄文時代の特徴を持つ石器、それに伴う石器が大量出土している。

番号	遺跡名	所在地
①	まるやま遺跡	津名郡淡路町岩屋
②	岩屋遺跡	津名郡淡路町岩屋
③	船木遺跡	津名郡北淡町船木
④	中島遺跡	津名郡五色町中島
⑤	真野谷遺跡	洲本市由良
⑥	柿坪遺跡	三原郡緑町倭文
⑦	長原遺跡	三原郡南淡町賀集
⑧	小倉遺跡	三原郡南淡町阿万
⑨	堂の前遺跡	津名郡北淡町育波
⑩	武山遺跡	洲本市宇山
⑪	ナキリ遺跡	津名郡淡路町岩屋
⑫	佃遺跡	津名郡東浦町浦
⑬	谷町筋遺跡	三原郡西淡町志知

表1 淡路島島内出土の有舌尖頭器一覧表

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 概要

まるやま遺跡は、サヌカイト製造物の採集などにより当初から遺跡として周知されていたものである。しかしながら、ながらく時期・範囲等については不明な点が多く残る遺跡であった。

本州四国連絡道路（神戸・鳴門ルート）の建設に先立ち、兵庫県教育委員会では、遺跡の分布調査を実施し、埋蔵文化財の存在が確認された地点については、確認調査を実施した。

「まるやま遺跡」に関する遺跡名称については、現地調査の段階において、「まるやま遺跡」・「丸山遺跡」など混乱を來したが、遺跡分布地図に記載されている、「まるやま遺跡」を本遺跡名として使用する。まるやま遺跡の範囲は広く、今回の報告地点は、「丸山地点」とした。

### 第2節 確認調査

本州四国連絡橋公団の依頼を受けて、平成2年12月3日～平成3年2月21日にかけて実施した。

道路建設予定地内を調査範囲の対象として、遺構・遺物の広がりを検出することを目的に調査を行った。

調査にあたっては道路計画予定地内に、20m間隔で2×2mのグリッドを設定した。ただし、北淡路地域は丘陵部の多い地域であり、地形の状況に応じてグリッド位置を変更したものもある。

確認調査の結果、表土層以下から弥生時代の土器および石器・中世遺物の出土をみた。このため、遺物の出土したグリッドを中心として、約100m<sup>2</sup>の範囲を対象として全面調査を実施することとなった。

### 第3節 全面調査

全面調査は、本州四国連絡橋公団の依頼を受けて、以下のとおりおこなった。

平成4年6月1日～6月30日において、全面調査を実施した。確認調査で出土した弥生時代～中世の遺物とともに、風化が顕著なサヌカイト製造物の出土もみられたため、弥生時代をさらに遡る遺物・遺構の存在が考えられた。時期を改めて、さらに調査を実施して、縄文時代草創期の良好な資料を得るにいたった。

### 第4節 整理作業

出土品整理作業は、本州四国連絡橋公団の依頼を受けて、平成7年度～9年度にかけておこなった。

#### 平成7年度

出土品の水洗等、基礎的な整理は現地調査の間にすでに終了していた。そこで、平成8年度は、遺物のネーミング・実測作業を中心に行った。整理作業は、当事務所非常勤嘱託員:山口卓也・古谷章子があたった。

#### 平成8年度

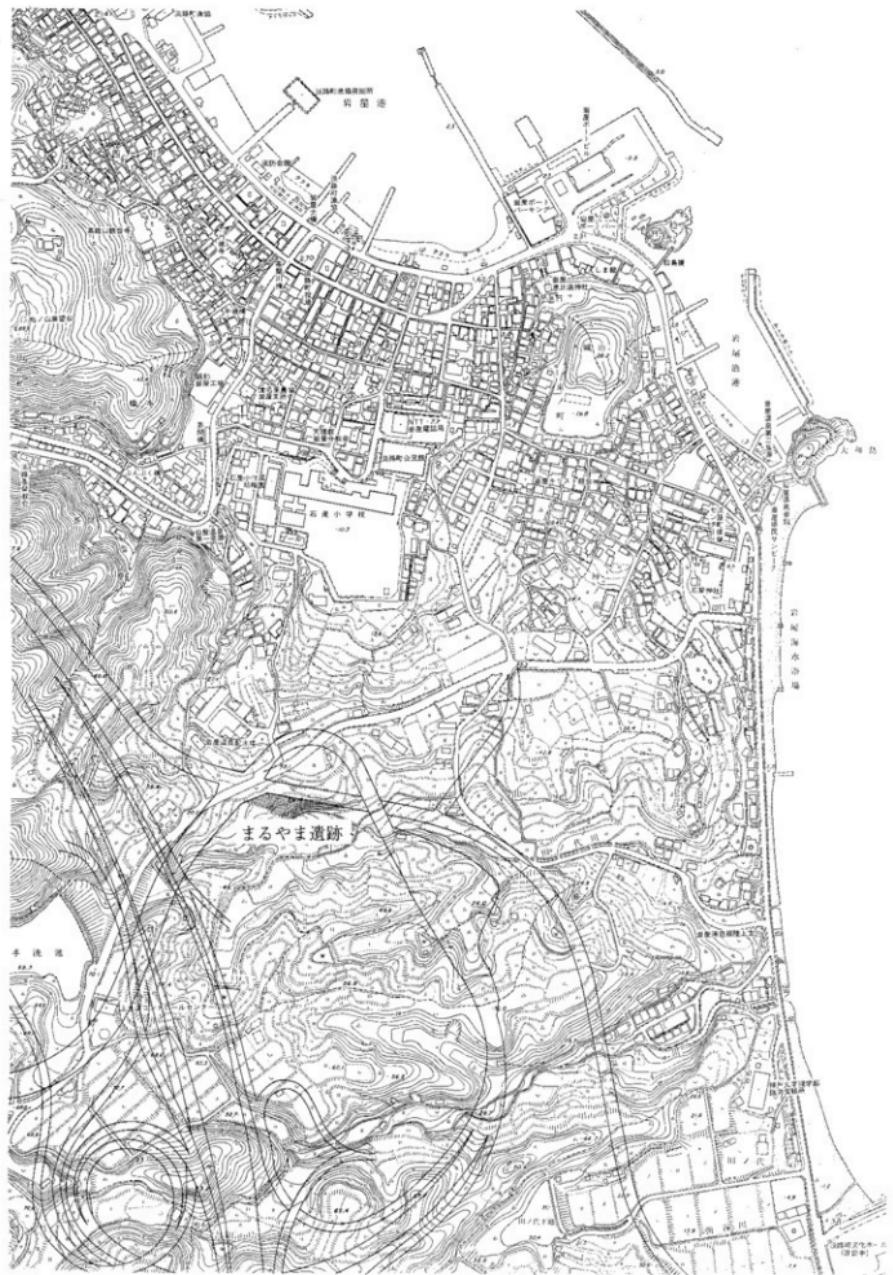
遺物写真の撮影、写真整理、遺構図補正、トレース等を実施した。整理作業は、当事務所非常勤嘱託員:古谷章子・八木和子・松木 瞳があたった。

#### 平成9年度

発掘調査報告書のレイアウトをおこない、刊行した。整理作業は、当事務所非常勤嘱託員:古谷があたった。



第2図 遺跡の位置図



第3図 遺跡の位置と周辺地形図



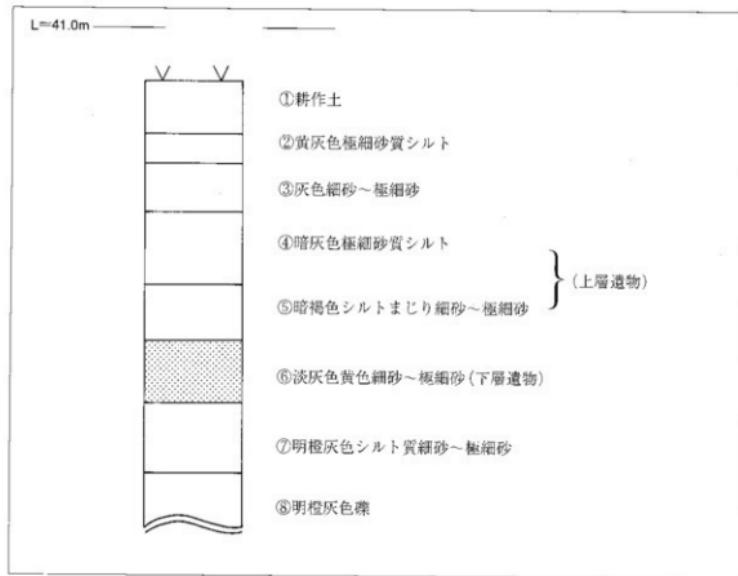
第4図 周辺地形図

### 第3章 遺跡の立地と基本層序

#### 第1節 遺跡の立地

まるやま遺跡の立地する兵庫県津名郡淡路町岩屋は、津名山地の北端に位置する（第2図）。津名山地は淡路島北部を南北に縱断し、この淡路町で終焉する。このため、町域の大半は山林で占められ平坦地が極めて少ない。まるやま遺跡は、明石海峡を眼下に見下ろす、この津名山地から派生する支尾根の南側斜面に展開する。遺跡周辺は、派生する尾根と谷が入り組み、複雑な地形を呈している（第3図・第4図）。今回の調査地区は、これらの支尾根群の一つである。標高は36～40mを計る。

この淡路島北端部の岩屋地区は、かねてよりサヌカイトの原石が採集可能な地点として知られてきた。近隣各地の遺跡のサヌカイト資料の中には、岩屋産サヌカイトとして比定される資料も多い。特に縄文・弥生時代には、打製石器の石材として神戸・播磨といった地域においても少なからずが利用されている。



第5図 基本層序図

## 第2節 基本層序

本遺跡の基本層序は、以下のとおりである(第5図)。

本遺跡の地目は水田である。4枚の棚田からなり、水田1枚につきその堆積土層は違ってくる。今回の調査で縄文時代草創期の遺物が検出できたのは、1枚の水田からであるため、この堆積層を基本土層とする。

- ①層 耕作土(現代の耕作土である)
- ②層 黄灰色極細砂質シルト(土壤化しており旧耕作土と考えられる)
- ③層 灰色細砂～極細砂
- ④層 暗灰色極細砂質シルト
- ⑤層 暗褐色シルトまじり細砂～極細砂
- ⑥層 淡灰色黄色細砂～極細砂
- ⑦層 明橙灰色シルト質細砂～極細砂
- ⑧層 明橙灰色腐

この内、④層暗灰色極細砂質シルト・⑤層暗褐色シルトまじり細砂～極細砂に、縄文時代後期の遺物・弥生時代の遺物・中世の遺物が混在している。

⑥層は、若干土壤化を受け、風化している層である。この⑥層淡灰黄色細砂～極細砂において、縄文時代草創期の遺物が出土している。

## 第4章 調査の結果

### 第1節 遺跡の概要

縄文時代後期～中世の各時期の遺物は、混在した出土状況を示している。調査段階においても、プライマリな遺物包含層は確認できなかった。おそらく水田形成時など、後世の地形の変更などにより混在したかたちを呈していると考えられる。また、この時期の遺構についても検出できなかった。下層遺構面は、堆積の厚さは、5センチから10センチ程度であるが、縄文時代草創期の良好な遺構面として把握することができる。

### 第2節 遺構・遺物

#### 1.概要

今回の調査にあたり検出されたのは、石器ブロック・木葉形尖頭器と搔器を中心となる石器群である。遺構については、調査区の北西部にのびる可能性があった。この地区については、国道28号線の改良工事に伴う発掘調査で、すでに調査済みである。遺構の解釈は、このデータを加えた上で改めて論じたい。ここでは、状況のみを記すこととする。石器群については、遺跡周辺で採集可能なサヌカイトを、石器製作の材料としていると考えられる。岩屋地区周辺で、採集可能なサヌカイト原石は、ほぼ拳大であり、本遺跡の出土遺物もこれに合致する。

#### 2.遺構

今回の調査で検出された遺構は、石器ブロックが3基である。うち2基については、調査区の北西部へとのびる可能性がある。

石器ブロックは、遺跡内の北西部、舌状にのびる微高地上に占位する形で展開している(第6図)。

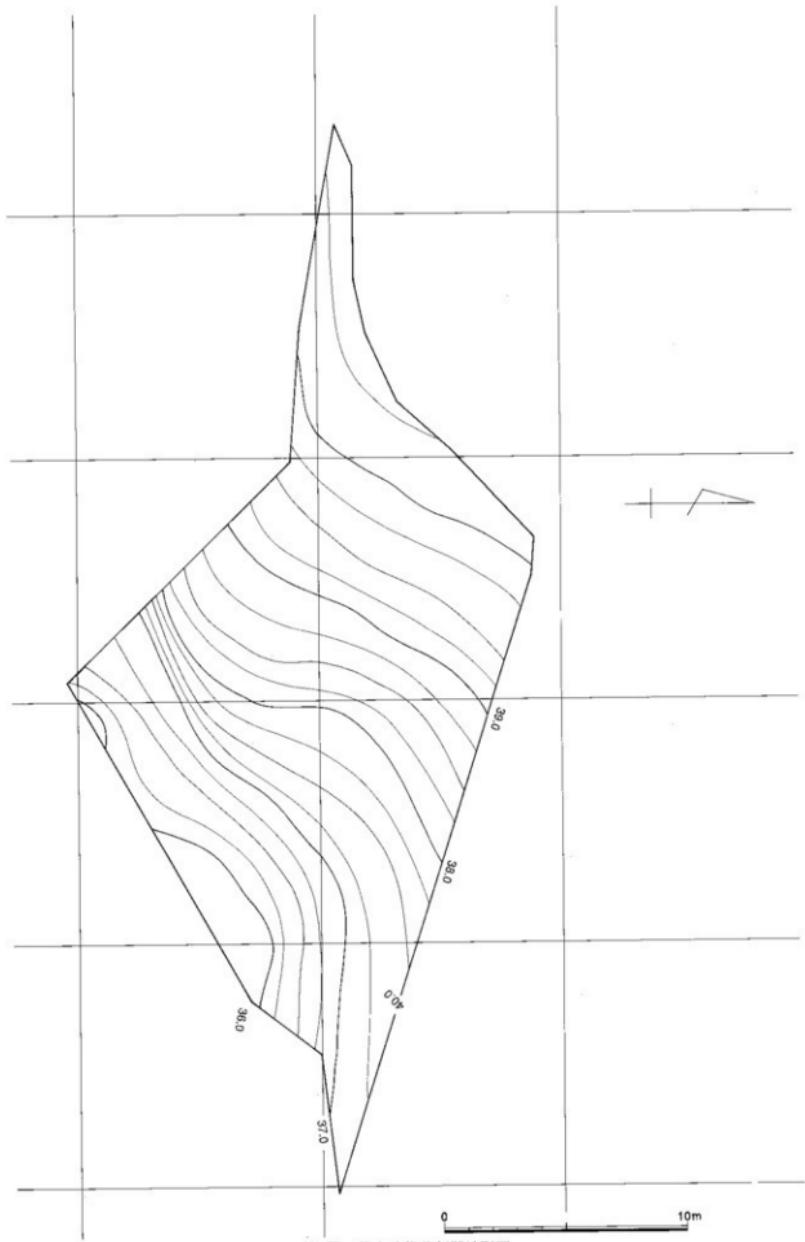
石器ブロックは、遺物の分布状況から比較的容易に識別することができる(第7図)。これに、遺物の平面出土状況(第8図)を作成して、検討を加えた。

ブロック1は、本遺跡内で終結するブロックである。ほぼ円形を呈している。ブロックの中心部に、もっとも遺物が集中する。この遺物集中区に、木葉形尖頭器・同未製品・搔器・削器が固まった状態で検出されている。木葉形尖頭器・同未製品・搔器など、製品のしめる割合が高いブロックである(第9図・第10図)。分布図には、原位置の確認できた資料のみを掲載した。

ブロック2は、ブロック1の北西部に隣接するものである。調査区外にのびる可能性が高い。有舌尖頭器が検出されているが、製品の比率は低い。

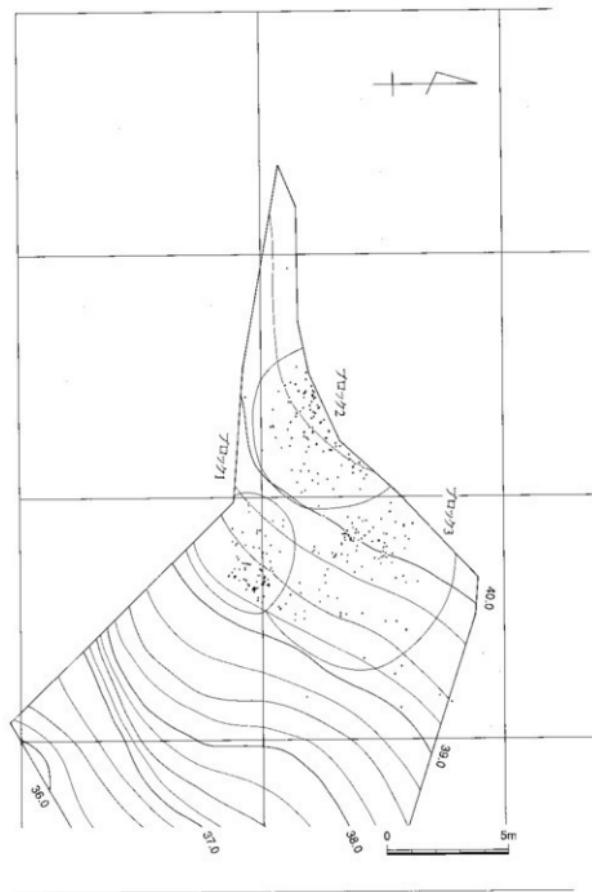
ブロック3は、ブロック1の北側に隣接する。ここでも、製品の比率は低い。

今回の調査区では、前述したとおりブロック1が、尖頭器類の出土頻度がもっとも高い。特に搔器については、このブロック1からの出土のみである。これに対して、ブロック2・ブロック3では、楔形石器・二次加工痕がある石器・使用痕を有する剥片の比率が高くなる(第11図)。もっとも、各ブロックとも尖頭器の調整剥片をはじめとした剥片・碎片の比率がもっとも高い。



第6図 縄文時代草創期地形図

40.0m -



40.0m -

第7図 遺物水平・垂直分布図

表2 まるやま遺跡石器組成一覧

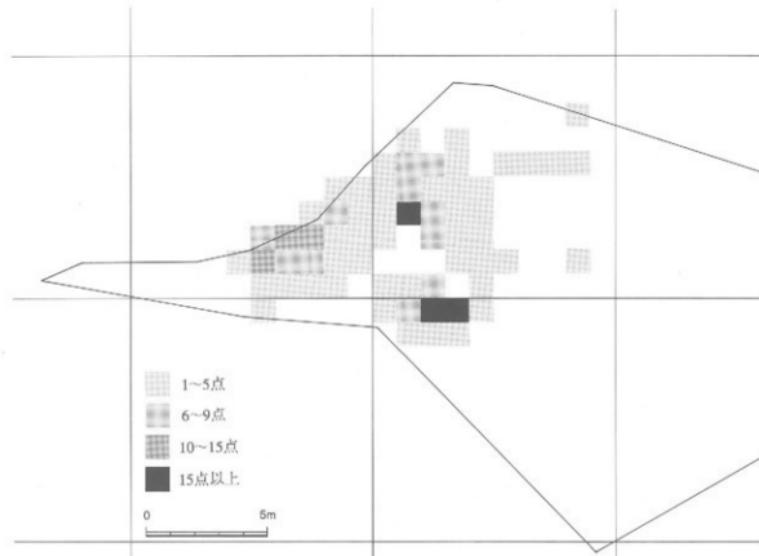
	ALL	サスカイト	チャート	流紋岩	その他	石材不明
木葉形尖頭器	1	1				
有舌尖頭器未製品	1	1				
尖頭器未製品	6	6				
石錐	5	5				
円形彫器	2	2				
先刃彫器	15	15				
削器	9	9				
二次加工を有する削片	3	3				
楔形石器	41	40		1		
石核	15	13	1		1(石英)	
剥片	474	461	3	8	1(花崗岩)	
加工痕ある削片	23	23				
使用痕ある削片	15	15				
石斧破片	1				1(緑色凝灰岩)	
叩き石	7				4 *注1	3
磨石	2				2(石英)	
サスカイト原石	10	10				
チップ	163	163	1			
器種不明	4				4 *注2	

注1 片岩・緑色凝灰岩・花崗岩・安山岩 各1

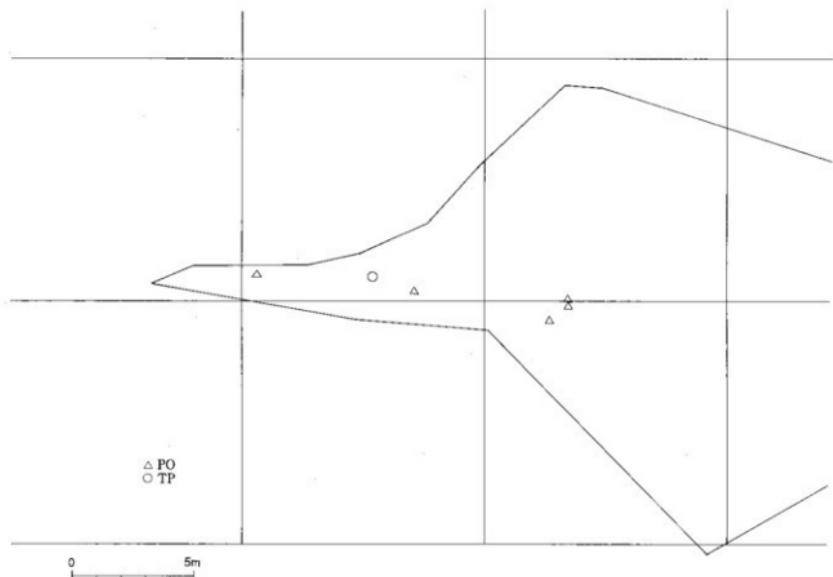
注2 片岩1 緑色片岩3

表3 石器略号表

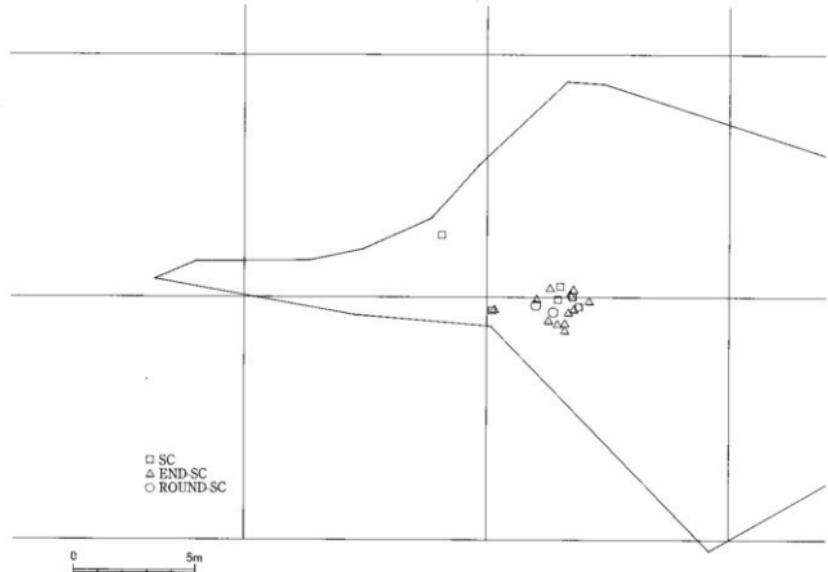
PO	尖頭器(未製品)	RF	加工痕ある削片
TP	有舌尖頭器(未製品)	CO	石核
SC	削器	UF	使用痕ある削片
END-SC	円形彫器	PS	楔形石器
ROUND-SC	先刃彫器		



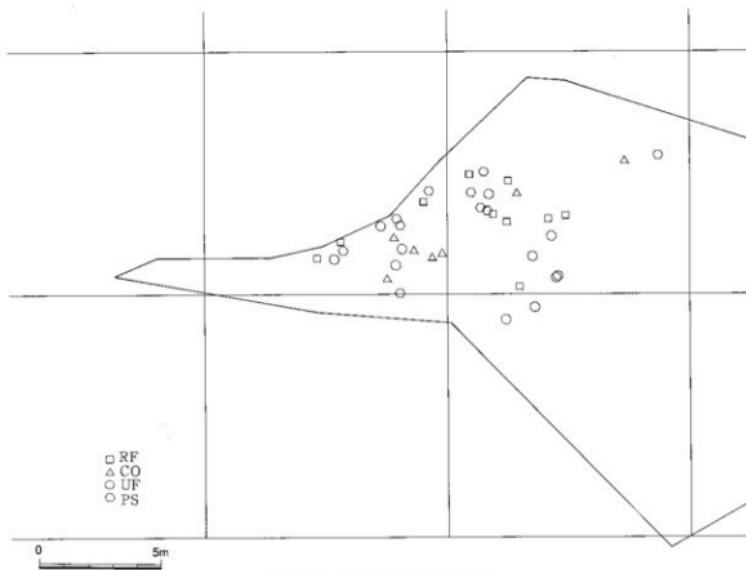
第8図 遺物平面出土状況



第9図 器種別分布図 (I)



第10図 器種別分布図 (II)



第11図 遺物器種別分布図（III）

### 3. 遺物

今回の調査では総点数で約800点の石器の出土をみた。出土遺物は上層出土の遺物と下層出土の遺物とに分かれるが、上層出土の遺物についても図化した。縄文時代草創期の遺物としては、土器片3点・有舌尖頭器1点・木葉形尖頭器(未製品含む)7点・先刃搔器15点・円形搔器2点・削器8点・楔形石器40点が出土しているほか、加工痕を有する剥片・使用痕を有する剥片・石核・碎片が出土している。使用石材は、流紋岩と見られる剥片が数点の他は、ほぼサスカイトで占められる。本報告では、緻密な構造を持つサスカイト資料のみ記述することとし、荒い構造を持つ資料、流状構造を持つものについては記述を省略した。

#### 土器

いずれも遺存状態が悪くかつ細片であるため、図化は出来なかった。また、詳細も不明である。器厚が極めて薄い特徴を持つが、磨耗が著しい。器色は赤褐色と黒褐色の2例がある。

#### 木葉形尖頭器 (第12図-1)

1は、小形の木葉形尖頭器である。緻密な構造を持つサスカイト製である。背面側は馬縁から二次加

工が施され、器面は二次加工痕によって覆われる。特に縁辺部には細かい二次加工痕が顕著である。背面側が精緻な二次加工痕に覆られるのにたいして、腹面側は荒い二次加工が施されるにとどまる。最大幅は基部付近にあり、断面形態は蒲鉾状となる。長47mm、幅24mm、厚さ9mm、重量9.7gを測る。

#### 有舌尖頭器未製品(第12図-2)

2は、有舌尖頭器の未製品である。緻密な構造を持つサスカイト製である。背面に縫面を広くとどめ、製作途中の未製品と考えられる。すでに基部の作出はなされており、基部形状は判別できる。鋭い逆三角形の舌部を持ち、基部は身部の主軸に対して直角となる。身部の両側縁は緩やかに湾曲する。現存長53mm、幅24mm、厚さ8mm、重量8.1gを測る。

#### 尖頭器未製品(第12図-3～8)

中には、棄損によると考えられるものもあるが、便宜上未製品として一括した。

3は、上半部の残存である。サスカイト製である。表裏両面とも二次加工痕で覆われる。身部長にたいして幅が細い、細身の尖頭器が復元できようか。現存長33mm、幅20mm、厚さ7mm、重量5.1gを測る。

4は、上下を欠損する資料である。緻密な構造を持つサスカイト製である。表裏両面とも精緻な二次加工によって覆われる。特に縁辺部に細かい二次加工が集中する。残存する厚さが薄いこと、両側縁が直線的なことから有舌尖頭器の棄損品と考えられる。現存長24mm、幅20mm、厚さ5mm、重量5.0gを測る。

5は、上下両端を欠損する資料である。これも緻密な構造を持つサスカイト製である。表裏両面が荒い二次加工により覆われる。器厚が、他の尖頭器資料に比べて極めて厚いこと、両側縁が直線的なこと、風化の度合いが浅いことから、弥生時代の石剣の可能性が高い資料である。他の資料とは離れたブロック外遺物であり、出土地点も谷部U分からの出土である。現存長49mm、幅30mm、厚さ13mm、重量24.4gを測る。

6は、基部部分のみが残る資料である。サスカイト製である。裏面の右半部に素材の面を残す。現存長23mm、幅31mm、厚さ9mm、重量4.5gを測る。

7は、上端を欠損する資料である。サスカイト製である。表裏両面とともに荒い二次加工が施されている。最大幅は基部よりにあり、厚手の資料である。現存長58mm、幅35mm、厚さ13mm、重量28.2gを測る。

8は、基部部分のみが残る資料である。サスカイト製である。裏面の右半部に素材の面を残す。また、裏面右側縁には整然と並ぶ二次加工痕が顕著である。現存長27mm、幅29mm、厚さ9mm、重量8.1gを測る。

本遺跡出土の木葉形尖頭器は、製品が1点のみで、他はほぼ未製品で占められる。このために最終的な形状は判然としない。以下、未製品より判断して本遺跡の尖頭器群の特徴を記すと、

- ①長さが10cmを越えるような大形のものは存在しない。
- ②断面形態が三角形を示すものが多く、表裏の関係が明白である。
- ③平面形態は若干幅広のものが多い。
- ④素材は剥片・板状の礫が考えられるが、剥片素材のものが大半をしめる。
- ⑤素材の石材はサスカイトに限られ、大きさ、またその構造から付近で採集可能な石材が使用されて

いると考えられる。

#### 石鎌(第12図-9~13)

今回の調査では、5点の出土をみた。いずれもサヌカイト製の資料である。上層からの出土であり、草創期の遺物に組成として加わるのかは疑わしい。

9・10・12は、いずれも凹基盤である。9が、現存長17mm、幅16mm、厚さ3mm、重量0.6gを測る。10が、現存長16mm、幅16mm、厚さ3mm、重量0.4gを測る。12が現存長23mm、幅18mm、厚さ5mm、重量1.2gを測る。

11は、平基盤の基部分が残存する。現存長11mm、幅13mm、厚さ5mm、重量0.6gを測る。

13は、未製品と考えられる。現存長25mm、幅13mm、厚さ6mm、重量2.0gを測る。

#### 搔器(第12図-16~30)

搔器は、本遺跡で安定した出土量を示す資料である。搔器が、本遺跡の石器組成中に占める割合は高く、本遺跡の大きな特徴となる。

#### 円形搔器(第12図14・15)

14・15は、円形搔器と分類した。いずれもサヌカイト製資料である。

14は、肉厚な素材を用いている。左図の表面には周縁からの二次加工痕をとどめ、特に縁辺部の二次加工は、急角度に施されている。階段状剥離が顕著でもある。上下両端の二次加工痕の稜は、著しく磨耗している。右図に見られる二次加工痕は平坦なものである。現存長42mm、幅40mm、厚さ17mm、重量30.1gを測る。

15も、肉厚な素材を用いている。周縁から二次加工が施されている。縁辺部の二次加工は急角度に施されている。右図側の二次加工は荒く、素材の面が広く残されたままである。現存長40mm、幅35mm、厚さ12mm、重量23.0gを測る。

#### 先刃搔器(第12図-16~30)

16~30は、先刃搔器とした。いずれもサヌカイト製の資料である。先刃搔器は、29を除いて、少しまりの縦長剥片を素材としている。素材剥片の末端を意識して、腹面側からの急角度の二次加工により、正面観が弧状の刃部を作出している。なんらかの二次加工によって、打面・打瘤を除去するものと、二次加工を施さずに打面・打瘤を残置するものがある。二次加工は、刃部形成のみに限られるものと側縁部から刃部へ連続しているものとがある。正面観が梅指状を呈する資料が多く、形態上の齊一さがみられる。側縁部に成される二次加工は、形態上の調整と考えられる。さらに、いずれの出土資料も刃部を形成する稜は、使用によるものと考えられる摩耗が著しい。

16は、背面に擦面をとどめる剥片を素材としている。背面側左側縁から末端部にかけて、急角度の二

次加工が連続する。現存長34mm、幅32mm、厚さ12mm、重量14.2gを測る。

17は、背面側左側縁に礫面をとどめる。打面は折れ面により除去されている。急角度の二次加工は、ほぼ刃部に限られる。刃部の正面観はやや鋸歯状となる。現存長47mm、幅49mm、厚さ9mm、重量20.1gを測る。

18は、背面側に礫面をとどめる剥片を素材としている。打面・打瘤は、残置されたままである。打面は礫面打面である。二次加工は、背面側左側縁から末端部にかけて連続的に施されている。

19は、背面の一部に礫面をとどめる剥片を素材としている。打面・打瘤はともに折れ面により除去される。二次加工は、刃部に限られる。現存長35mm、幅40mm、厚さ6mm、重量9.2gを測る。

20は、細かく精緻な二次加工痕が目立つ資料である。打面・打瘤は残置され、礫面打面となる。現存長33mm、幅34mm、厚さ11mm、重量10.1gを測る。

21は、珍しく打面側を刃部とした資料である。打面・打瘤を除去するようなかたちで、背面側からの急角度の二次加工により、刃部を形成している。また、左図上部にも背腹両面からの二次加工痕が認められる。現存長38mm、幅28mm、厚さ9mm、重量13.0gを測る。

22は、薄い剥片を素材としているものである。二次加工は、刃部に限られる。現存長29mm、幅35mm、厚さ7mm、重量6.2gを測る。

23も、薄い剥片を素材としている。この資料も、素材剥片の打面側を刃部とする。腹面側からの二次加工により刃部が形成される。現存長21mm、幅25mm、厚さ6mm、重量2.8gを測る。

24は、背面に礫面を留める資料である。しかし、珍しく背面側に二次加工痕が顕著な資料もある。刃部は、整然と連続する二次加工により形成される。現存長32mm、幅31mm、厚さ10mm、重量9.1gを測る。

25は、風化の著しい資料である。二次加工により形成される稜の磨滅も著しく、観察が困難である。二次加工は、刃部に限られる。現存長40mm、幅32mm、厚さ10mm、重量11.6gを測る。

26は、背面側左側縁から末端にかけ二次加工が連続している資料である。側縁部に二次加工が認められる、他の資料体の側縁部が弧状を呈するのに対して、本資料は二次加工も緻密で連続したものであり、直線的な刃部を形成していると考えられる。削搔器と呼んでも差し支えのない資料である。現存長38mm、幅30mm、厚さ14mm、重量17.2gを測る。

27は、風化が著しい。これも、左側縁から連続した二次加工により刃部を形成している。

28は、荒い二次加工により刃部を形成した資料である。腹面側打面部付近にも、二次加工が及ぶ。現存長33mm、幅39mm、厚さ14mm、重量17.4gを測る。

29は、当遺跡としては大形の素材を利用した資料である。二次加工は刃部部分に限られる。風化が著しい資料である。現存長77mm、幅34mm、厚さ18mm、重量43.5gを測る。

30は、素材剥片の打面部側に、二次加工が施され刃部が形成されている。二次加工は両側縁部にも及んでいる。現存長41mm、幅25mm、厚さ6mm、重量7.2gを測る。

#### 削器(第14図-31~38)

先に述べた搔器が、素材の用い方、二次加工の施される部位、形態に置いて強い齊一性を示すのに対して、削器は二次加工のあり方や形態において、非常にバラエティに富む。ここでは、二次加工により直線的な刃部を形成している資料を削器として分類した。

31は、肉厚な剥片を素材としている。左図右側縁部に二次加工が認められる。上端は折れ面となる。現存長32mm、幅61mm、厚さ14mm、重量25.0gを測る。

32は、薄手の剥片を素材としている。素材剥片の打面部分に、背腹両面から二次加工を施して刃部を形成している。二次加工は緻密に入念に施されている。現存長63mm、幅39mm、厚さ4mm、重量10.7gを測る。

33は、これも薄手の剥片を利用した資料である。その右側縁上部に、細かい腹面側からの二次加工により直線的な刃部が形成されている。現存長39mm、幅41mm、厚さ7mm、重量6.5gを測る。

34は、背面に縛面を留める剥片の末端部に、主として背面側から二次加工を施して刃部が形成されている。刃部の正面観は、やや鋸歯状となる。現存長33mm、幅40mm、厚さ8mm、重量10.6gを測る。

35は、緻密なサスカイト製である。削器の中ではもっとも整った形状を呈している。二次加工は両側縁および打面部付近に腹面側から施されている。打面部付近の二次加工は階段状剥離が著しく、刃部は両側縁にあるとみていいであろう。現存長48mm、幅53mm、厚さ13mm、重量30.3gを測る。

36は、左図右側縁が刃部となる資料である。風化が著しく、特に刃部を形成する二次加工の棱は磨滅が著しい。現存長60mm、幅49mm、厚さ15mm、重量40.4gを測る。

37は、素材剥片の打面部側に二次加工を施して、刃部を形成している。二次加工は、背腹両面から施されている。現存長53mm、幅38mm、厚さ11mm、重量21.2gを測る。

38は、背面に縛面を留める厚手で大形の剥片を素材としている。二次加工は、背腹両面から認められるが、腹面側からのものが、緻密に連続している。現存長87mm、幅47mm、厚さ15mm、重量70.2gを測る。

#### 二次加工痕を有する剥片 (第15図-39~41)

剥片に、なんらかの二次加工が認められ、かつ定型的なものでない資料を二次加工痕を有する剥片として分類した。

39は、背面の左半部に縛面を留める剥片で、その末端部に数枚の二次加工痕が認められる。現存長30mm、幅39mm、厚さ9mm、重量8.8gを測る。

40は、素材剥片の腹面側左側縁に、背面側から数枚の二次加工痕が認められる。現存長34mm、幅32mm、厚さ9mm、重量5.9gを測る。

41は、横断面形態が正方形を呈する資料である。二次加工は左図の部分すなわち側面に見られ、直角に近い急角度に施されている。現存長61mm、幅21mm、厚さ10mm、重量17.1gを測る。

#### 楔形石器 (第15図-42~第17図-81)

相対する縁辺に、階段状剥離が著しいものを楔形石器とした。46をのぞいて、いずれもサスカイトを素材としている。図化した楔形石器のうち、原位置を確認できているものは第15図42~51である。42~51が縄文時代草創期の確実な資料となる。

42は、上下の両端に階段状剥離が認められる。現存長23mm、幅26mm、厚さ7mm、重量4.1gを測る。

43も、上下の両端に階段状剥離が認められる。風化が著しく灰白色を呈する。上下両端は、内湾を見せる。現存長36mm、幅36mm、厚さ11mm、重量18.1gを測る。

44は、上端の階段状剥離が顕著な資料である。現存長32mm、幅22mm、厚さ10mm、重量6.2gを測る。

45は、左図の面に縦面を留めている。その上下両端に階段状剥離が認められる。現存長26mm、幅22mm、厚さ8mm、重量4.3gを測る。

46は、珍しく流紋岩製の資料である。楔形石器のスパールと考えられる。現存長27mm、幅10mm、厚さ10mm、重量1.9gを測る。

47は、左図の面がほぼ縦面に覆われる。現存長25mm、幅31mm、厚さ11mm、重量9.2gを測る。

48は、上下両端に階段状剥離が認められる。下端の部分は潰れが著しい。現存長26mm、幅31mm、厚さ8mm、重量5.8gを測る。

49は、上端の階段状剥離が顕著な資料である。現存長25mm、幅24mm、厚さ10mm、重量4.9gを測る。

50は、階段状剥離がかなり進行しており、両面はほぼ階段状剥離に覆われる。現存長19mm、幅17mm、厚さ5mm、重量1.5gを測る。

51は、大形の資料となる。左図に縦面を留める資料である。その上端部に階段状剥離が顕著である。現存長41mm、幅49mm、厚さ21mm、重量29.5gを測る。

52~81は、上層出土の遺物である。楔形石器は、縄文時代各期を通じて存在する石器であり、かつ弥生時代には顕著に見られる石器である。このため、時期の特定が困難である。遺物の中には縄文時代草創期の出土層位の直上から出土しているものもあるが、同時期の遺物とは別に扱うこととする。資料個々には、風化の度合いに差があるものの、これも埋土中における状況によりその度合いに変化を受けることが予想される。ここでは、形態上の特徴のみを記す。

資料を概観すれば、大形のもの(70・78)小形のもの(75・76)までサイズ的には幅を持つ。大半は、長さ3センチから5センチ程度の方形を呈する。階段状剥離が進行し、両面にそれが顕著に認められるもの(53・60・63・65・66)や素材の面を広く残すものもある。

このうち、67~69は楔形石器のスパールである。77は、石錐の未製品の可能性が残る。また、78は下側縁部分の二次加工が連続しており、スクレイバーエッジのような形状を示すので、削器の可能性も残る資料である。

#### 石核(第17図-82~第18図-93)

82~93は、石核である。このうち原位置が確認できているものは、82・86・87・90・92・93である。

82は、右図の下側左半部に主要剥離面が残ることから、剥片が石核素材であると考えられる。左図の面に残る縦面を打面として、剥片剥離作業が進行するものである。現存長66mm、幅34mm、厚さ19mm、重量29.4gを測る。

86も、右図の中央部に剥離面を残す。大きさ・厚さからみて、分割された礫を素材としていると考えられる。剥片剥離作業は、左図に残る縦面を打面として進行している。右図の左・下側縁に残る剥離痕は、階段状剥離が著しい。現存長63mm、幅66mm、厚さ26mm、重量119.3gを測る。

92は、剥片もしくは分割礫を素材として、上面すなわち小口面を形成している剥離面から縦面が残る。右図側に剥片剥離が進行する。現存長53mm、幅75mm、厚さ23mm、重量99.8gを測る。

93は、円礫の分割礫を利用している。その分割面を打面として、若干の剥片剥離作業が認められる。現存長60mm、幅66mm、厚さ46mm、重量162.3gを測る。

87は、チャート製の石核である。現存長31mm、幅38mm、厚さ15mm、重量14.0gを測る。

#### 剥片(第19図-94・95)

94・95を図化した。うち、95が原位置を確認できた資料である。

95は、單剥離面を打面として得られた縱長剥片である。サイズ的に見ても木葉形尖頭器等の素材になりうる資料である。現存長78mm、幅43mm、厚さ24mm、重量43.4gを測る。

#### その他の石器(第19図-96～第20図-105)

いずれも上層からの出土ではあるが、緑色凝灰岩製で、石斧の一部分と考えられる資料(96)叩き石(97～101・103)、石英製の磨り石(104・105)器種は不明であるが、結晶片岩製の資料などが出土している。

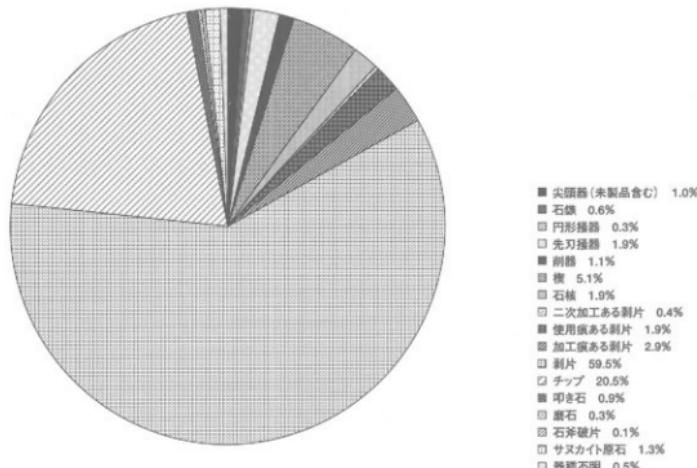
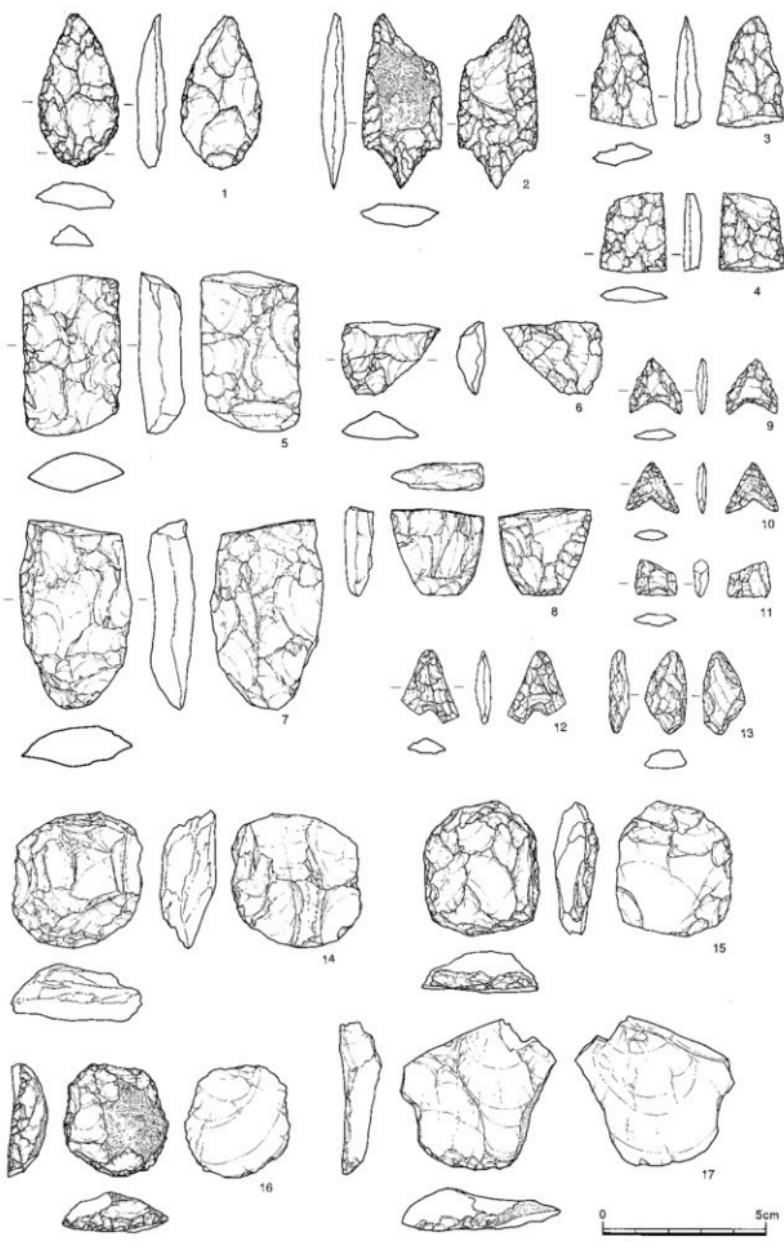


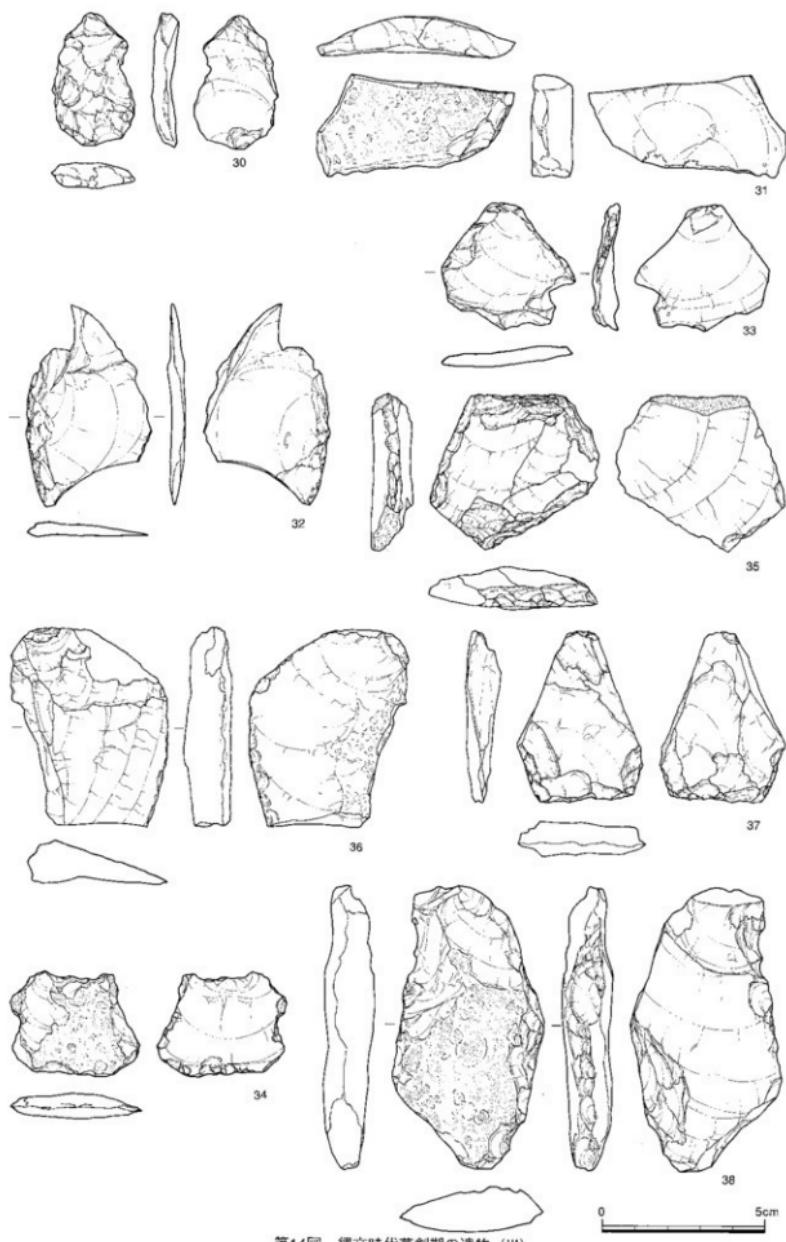
表4 まるやま遺跡石器組成円グラフ



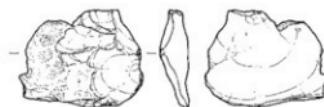
第12図 縄文時代草創期の遺物 (I)



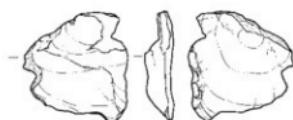
第13図 繩文時代草創期の遺物 (II)



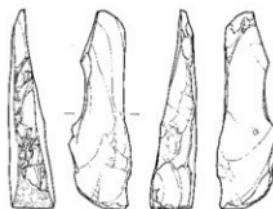
第14図 縄文時代草創期の遺物 (III)



39



40



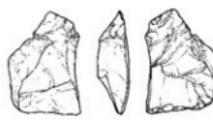
41



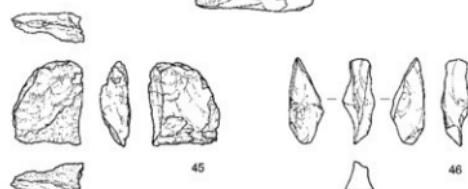
42



43



44



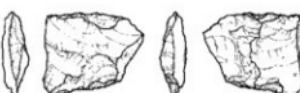
45



46



47



48



49

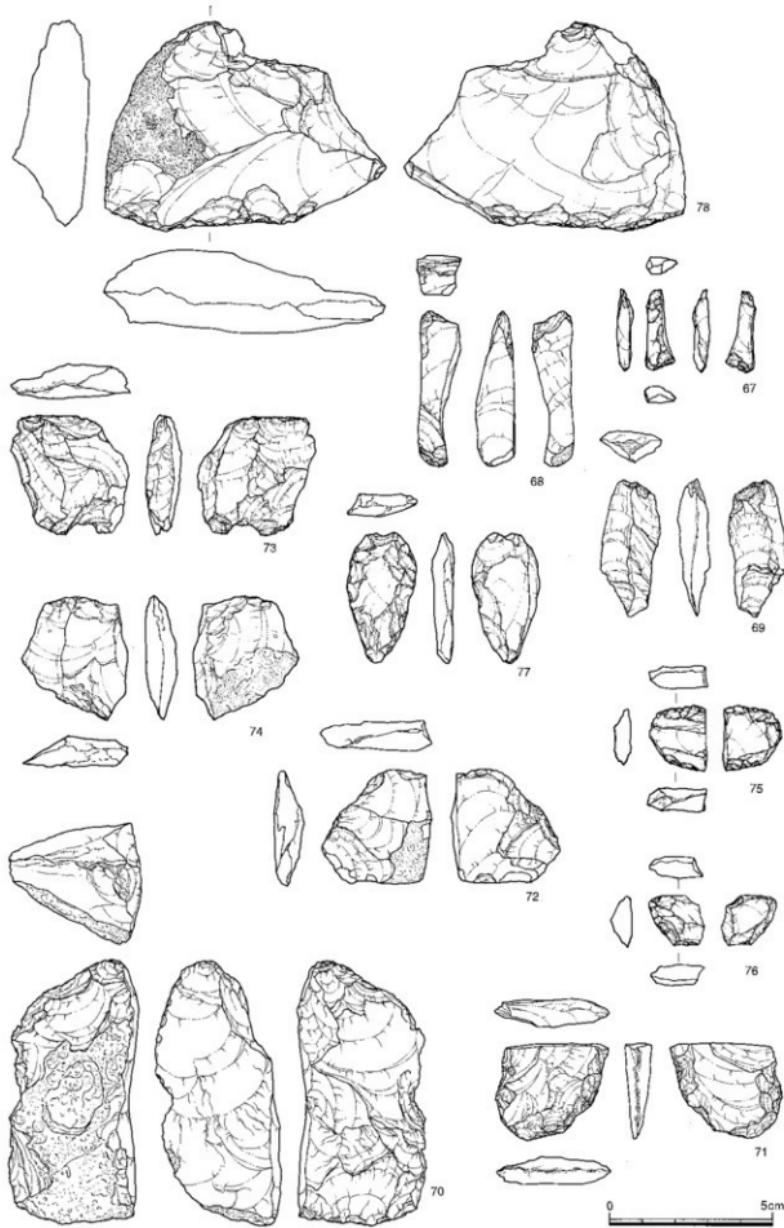


第15図 繩文時代草創期の遺物 (IV)

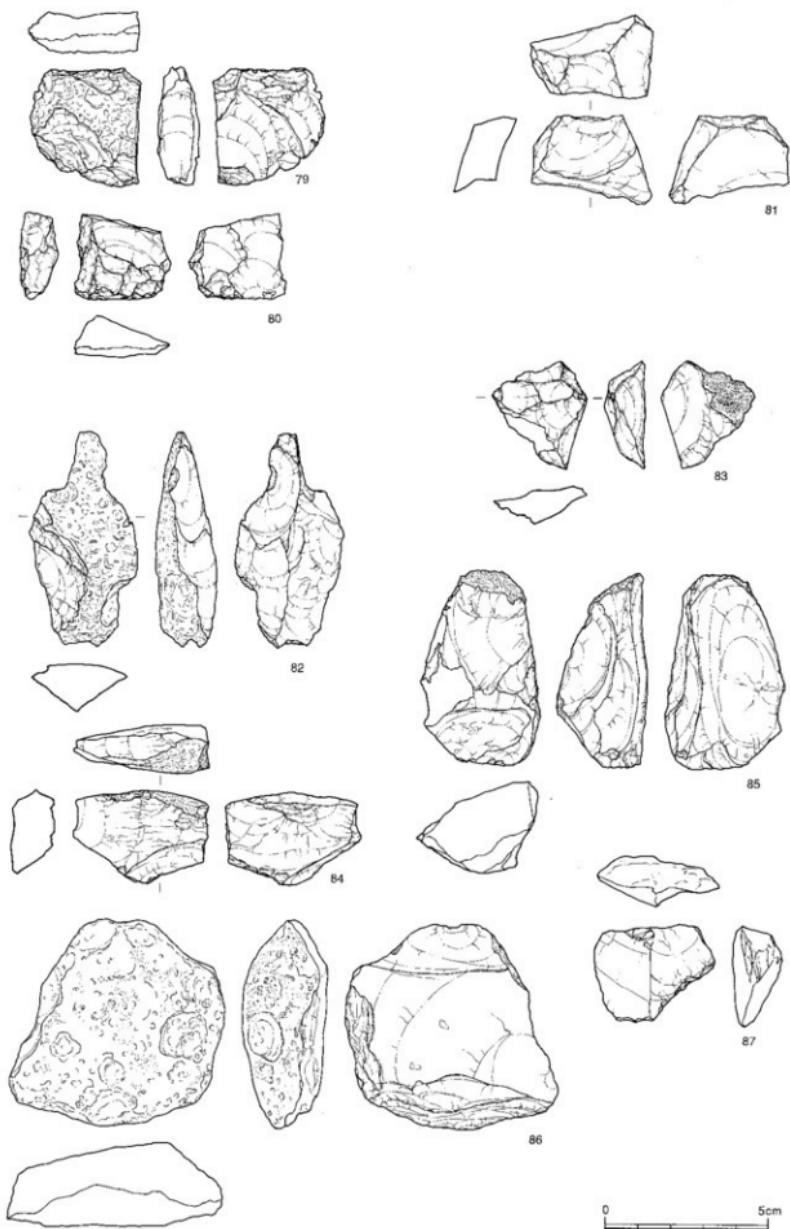




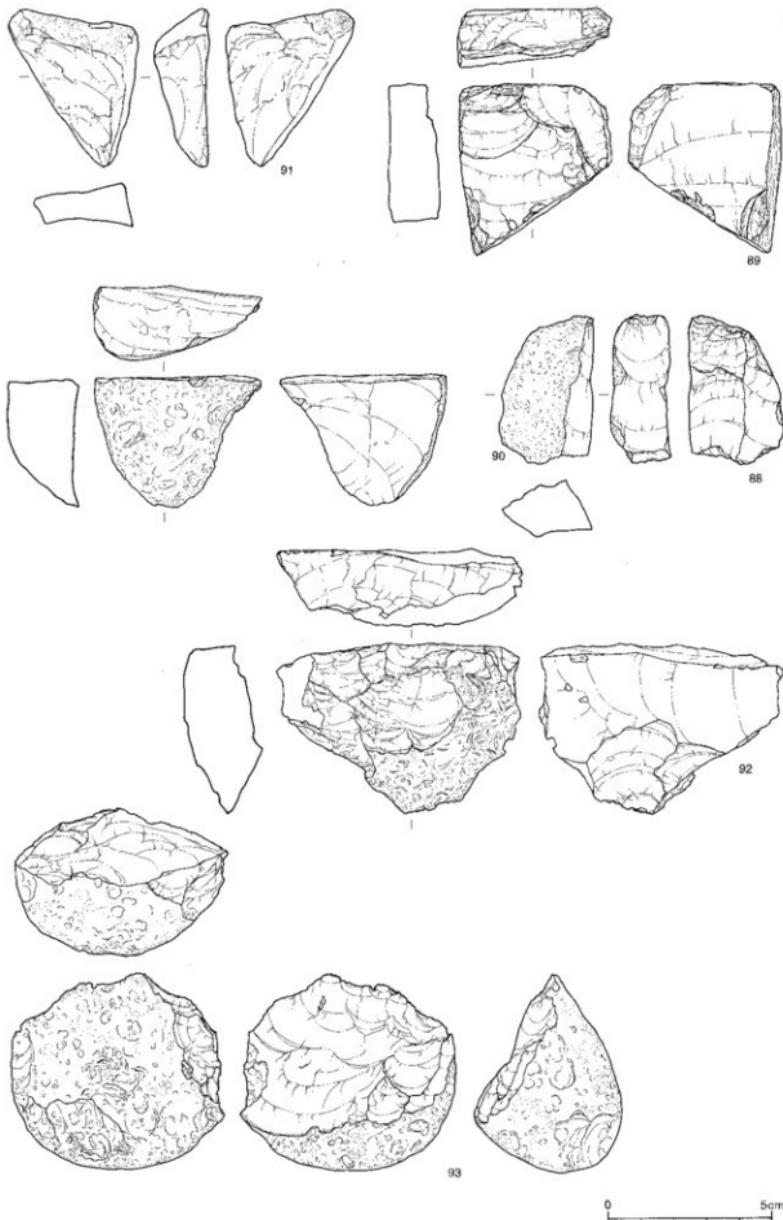
第16図 縄文時代草創期の遺物 (V)



第17図 縄文時代草創期の遺物 (VI)



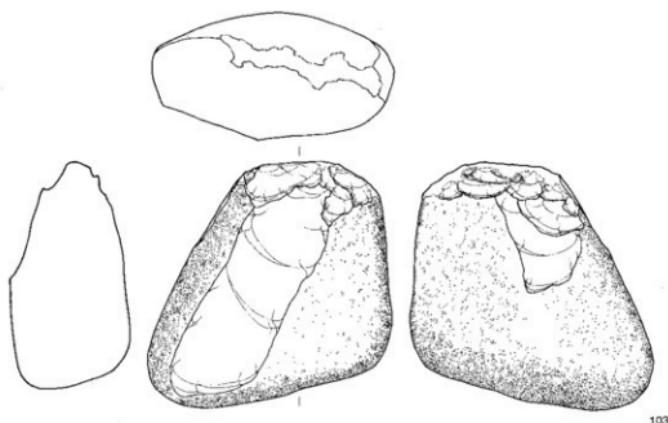
第18図 繩文時代草創期の遺物 (VII)



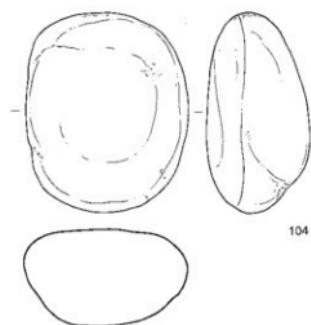
第19図 繩文時代草創期の遺物 (VIII)



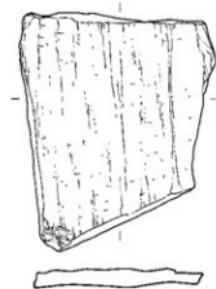
第20図 縄文時代草創期の遺物 (IX)



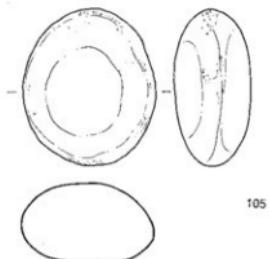
103



104



102



105



第21図 繩文時代草創期の遺物 (X)

### 第3節 その他の遺物（第21図・写真図版14図）

縄文時代と考えられる土器片のほか、その時代に属する遺物も僅かではあるが出土している。いずれも造構に属するものではなく、包含層から出土している。

#### 縄文土器

106・107は、縄文土器であると思われるが、表裏の磨滅が著しく、時期の特定は不可能である。

#### その他の土器

109は、青磁碗で底部のみ残存している。削り出しの低い高台をもち、全面に施釉をおこなうが、高台裏には施釉はおこなわれない。見込み部分に印花文を施す。

110も青磁碗で、口縁部のみ残存している。外面には鶴の不明瞭な蓮弁文が片彫りされる。口縁部は尖り気味におさまる。

111は瓦器碗で、口径は、13.7cm(復元値)である。器形は低平なものになるであろう。内面には圓ミガキは認められない。和泉型あるいは、その影響下のものに属すると考えられ、13世紀後半以降であろう。

112は、須恵器の鉢で、口径は28cm(復元値)で、口縁部をやや肥厚させ、端部は斜めになっている「東播系須恵器」で、12世紀中頃のものであろう。

113は、土師器の鍋で、口径は20.4cm(復元値)である。体部と口縁部の境に幅の狭い雛様の特記をもつ。口縁部は内傾し、端部は外反する。体部は、指による調整をおこなっており、タタキは認められない。

#### 土錘

有孔土錘(114・116)と管状土錘(115)がある。いずれも上師質である。

114は胴が膨らみ、算盤玉状を呈する。直径1.3cm、長さ1.35cmをはかる。

116は円筒状を呈し、直径3.25cm、長さ4.25cmである。

115は、手づくねで、胴部が膨らむ。直径1cm、長さ3.2cmをはかる。

#### 金属器

銅錢が3点出土したが、表土および遺物包含層の出土である。

124は「大平通寶」(北宋：初鑄年976年)である。

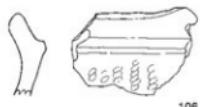
125は「皇宋通寶」(北宋：初鑄年1038年)である。

126は、錢貨名が判読不可能であるが、錢文の上は、「元」の篆書体である可能性が高いので、「元豐通寶」(北宋：初鑄年1078年)、「元祐通寶」(北宋：初鑄年1086年)、「元符通寶」(北宋：初鑄年1098年)のいずれかと考えられる。3点とも中世の渡来錢であろう。

鉄製品は2点出土している。いずれも機械掘削時に出土している。

127は釘で、断面方形の角釘である。頭部は欠損しているが、わずかに折り返しの痕跡がある。現存長は3.9cmである。

128は、現存長7.5cmで、頭部の先端を折り曲げている。釘であろうか。



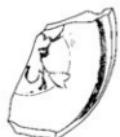
106



107



108



109



110



111



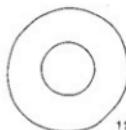
112



113



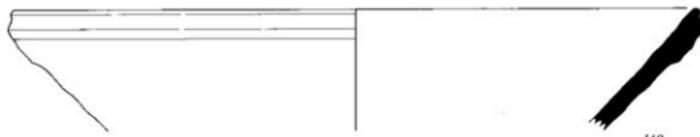
114



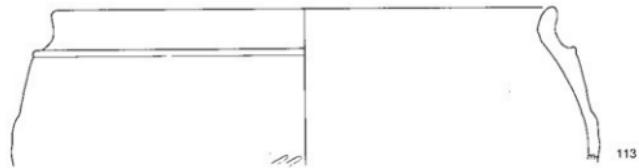
115



116



117



118



第22図 その他の遺物

## 第5章まとめ

本来まるやま遺跡の遺構・遺物の詳細な検討は、隣接する国道28号線の改良工事に伴う調査結果も含めた上で、検討されるべきであろう。ここでは、将来の予測もふまえて今回の調査成果を振り返りたい。

まるやま遺跡の今回の調査では、縄文時代草創期の良好な資料が得られた。当該時期の資料が検出されることが種々な近畿地方においては、大きな成果である。さらに、これまで不明な点が多かった岩屋産サヌカイトの原産地近くでの調査は、注目されるものであろう。

まるやま遺跡の石器群は、詳細は不明ながら土器の共伴出土をみており、土器出現期以降の遺跡であると考えられる。また、この石器群の特徴は、有舌尖頭器を組成を持つこと、有舌尖頭器の形態的特徴は、基部付近に返刺が明瞭であること。未製品であるため、断じることはできないが、身部がかなり長い形態を示すのではないかと考える。こうした形態的特徴を持つ有舌尖頭器は、増田一裕氏によれば、より古相を示すと考えられている(増田 1981)。未製品がほとんどではあるが、木葉形尖頭器が認められる。木葉形尖頭器は大形のものはなく、5センチ前後のものに收まりそうである。いわゆる柳葉形と呼ばれる細身のものはなく幅広、断面が三角形状のものが特徴的である。石鎚は、いずれも上層からの出土であり、組成中に入るかどうかははっきりしない。

まるやま遺跡の石器群の時間的位置づけは、近隣に資料が少ないこともあり、困難が伴う。近畿地方では、広野ウチカタビラ遺跡で、有舌尖頭器とともに、隆起線文土器段階から石鎚が出現している。また、有舌尖頭器そのものは、早期の神宮寺形式押形文土器段階まで存在する。まるやま遺跡における有舌尖頭器の形態的特徴、また搔器の形状が先刃搔器と呼べるような安定した形状を示すこと、石鎚が組成中に含まれない可能性が高いことから判断して、本石器群を隆起線文土器段階より古い段階に位置づけることが可能と考える。

## 引用参考文献一覧

檍原考古学研究所編 1994 『一万年前を掘る』 吉川弘文館

五色町教育委員会 1994 『五色町遺跡分布図』

波毛 康宏 1985 「淡路島の旧石器と有舌尖頭器」「竹ベラ」5

兵庫県 1992 『兵庫県史考古資料編』

兵庫県教育委員会 1991 『国領遺跡発掘調査報告書』

兵庫県教育委員会 1990 『谷町筋遺跡』

深井 明比古 1980 「兵庫における先土器時代終末から縄文時代草創期の石器群の様相」「藤井祐介君追悼記念考古学論叢」

北淡町教育委員会 1994 『舟木遺跡』

増田 一裕 1981 「有舌尖頭器の再検討」「旧石器考古学」22

三原 慎吾 1995 「近畿地方西部の縄文時代草創期の様相」「旧石器考古学」51

# 図 版



1.遺跡遠景（北から）



2.丸山遺跡全景



1.作業風景



2.ブロック1 遺物出土状況（南東より）



1.有舌尖頭器出土状況



ブロック1 遺物出土状況（北より）



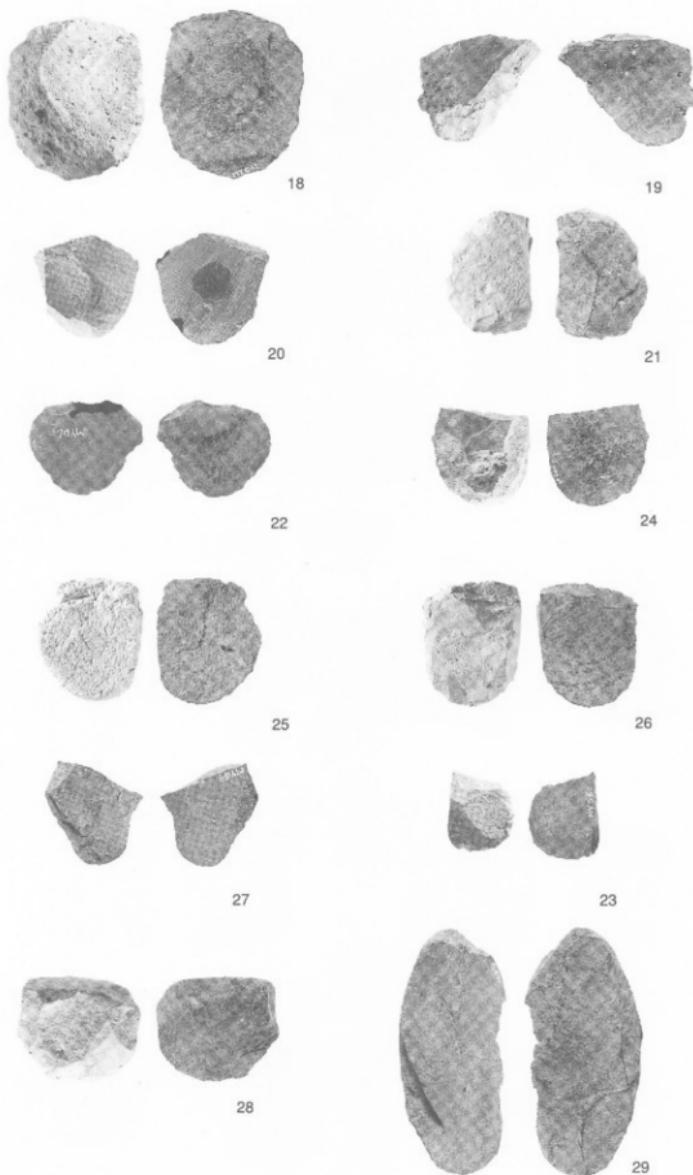
1. ブロック1 遺物出土状況（北西より）



2. 尖頭器出土状況



まるやま遺跡の石器 (I)



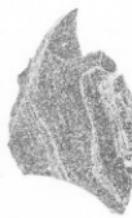
まるやま遺跡の石器（II）



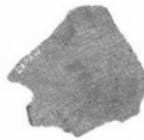
30



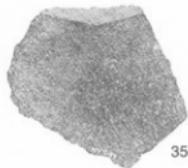
31



32



33



35



36



37



38

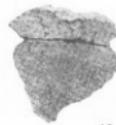
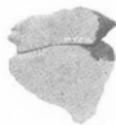
まるやま遺跡の石器 (III)



39



41



40



43



42



44



45



46



47



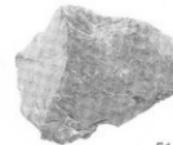
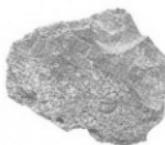
48



49

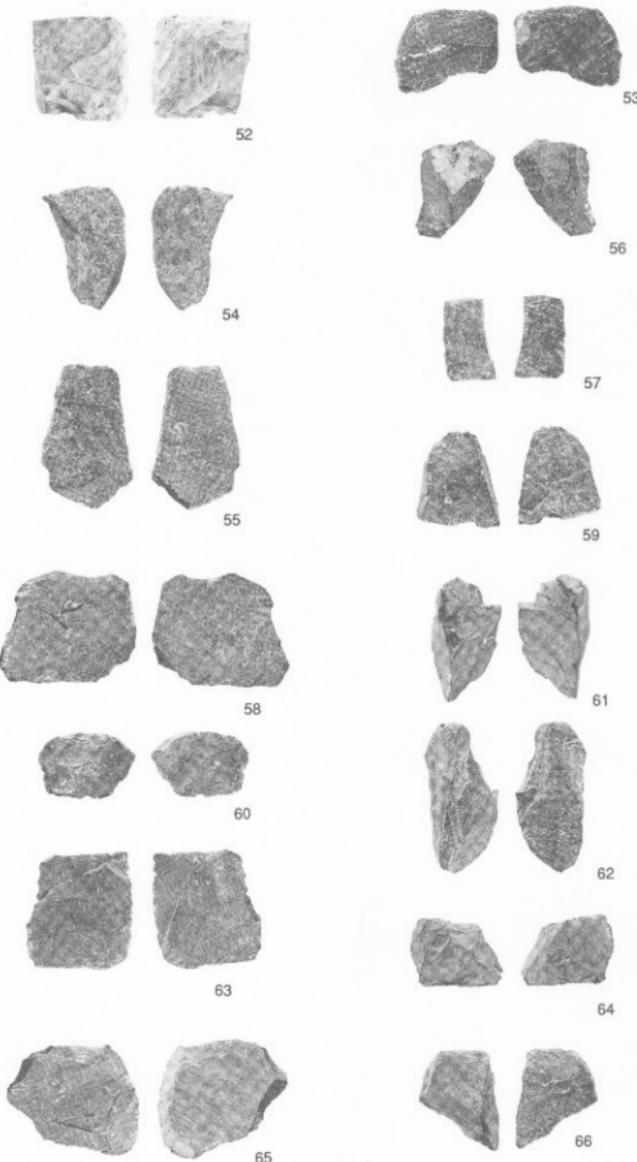


50

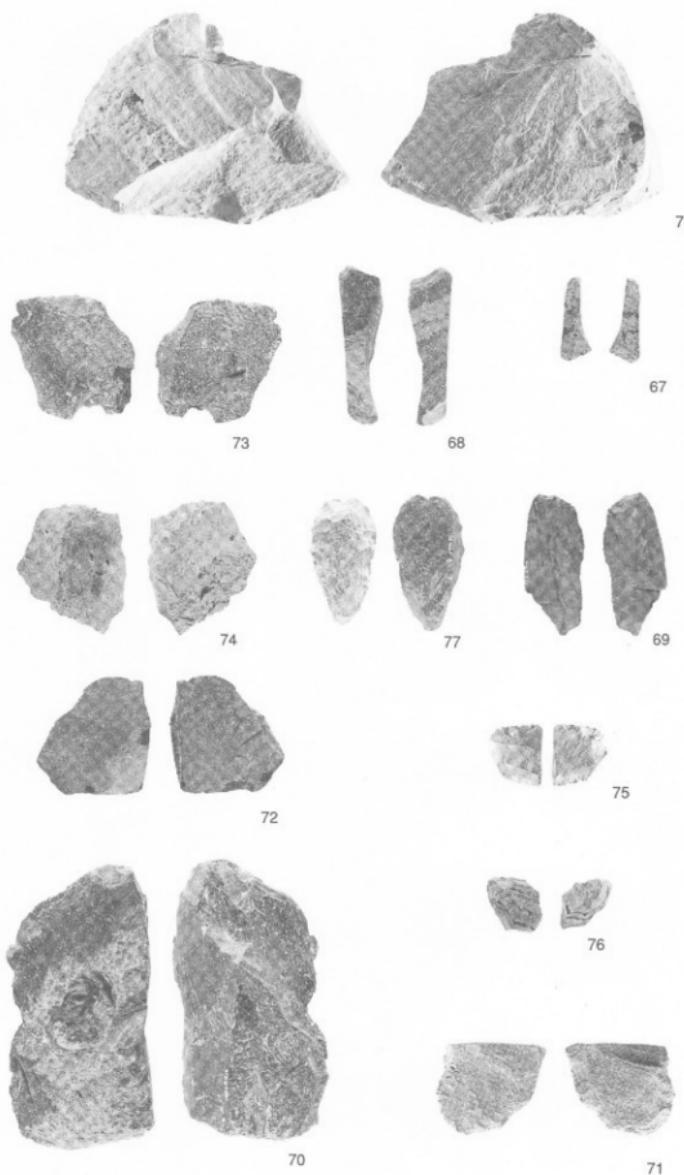


51

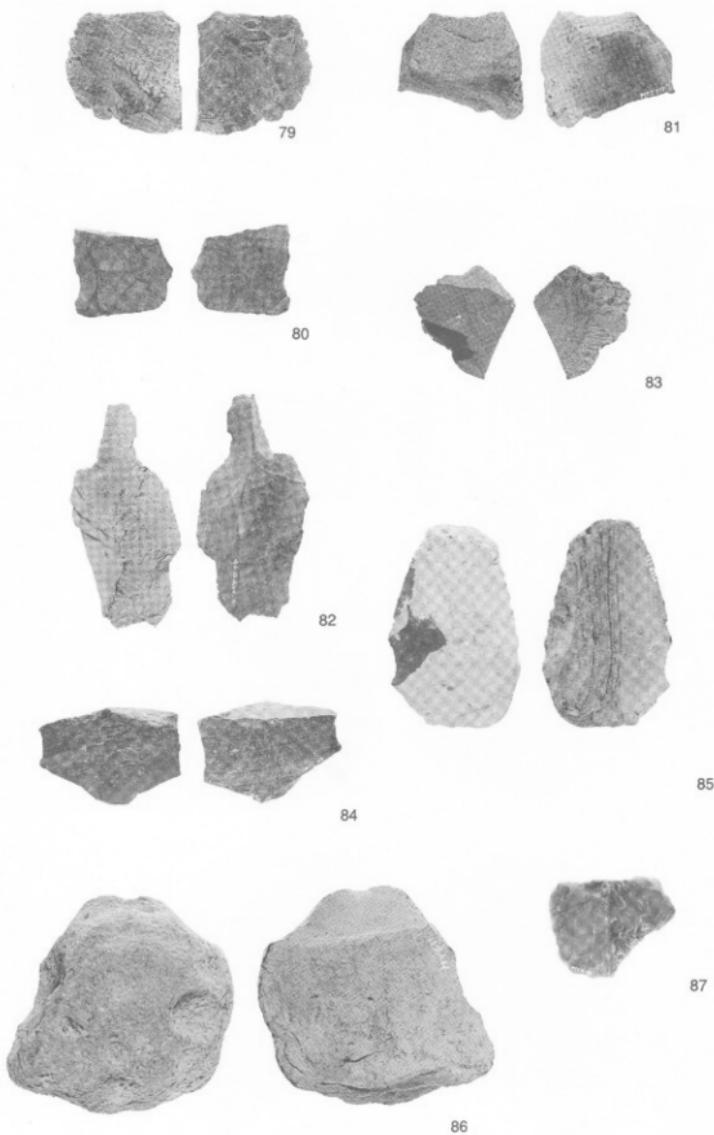
まるやま遺跡の石器 (IV)



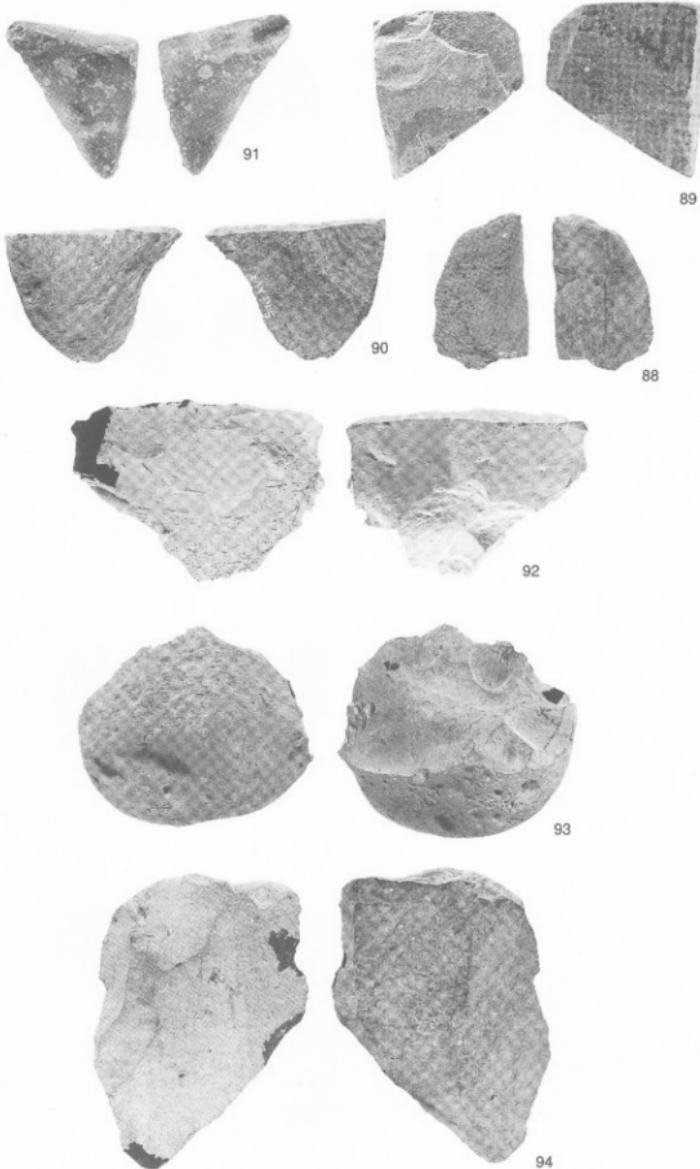
まるやま遺跡の石器 (V)



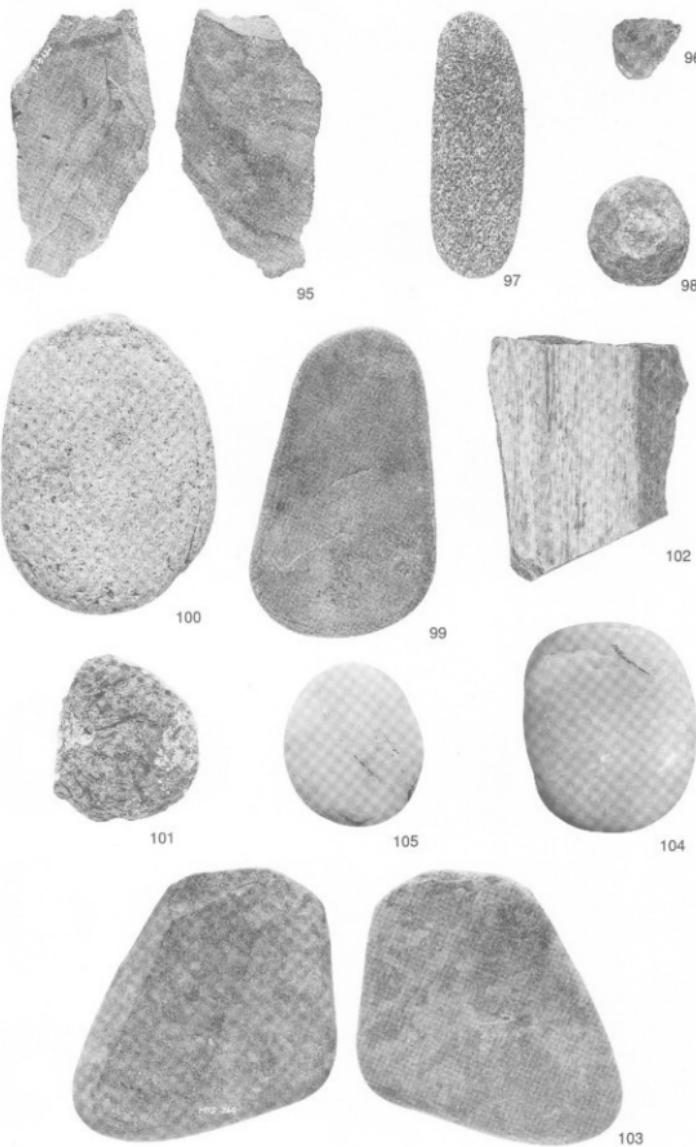
まるやま遺跡の石器（VI）



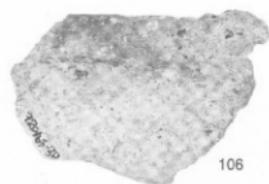
まるやま遺跡の石器 (VII)



まるやま遺跡の石器 (VIII)



まるやま遺跡の石器（X）



106



107



108



109



110



113



112



111



114



115



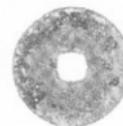
124



124



125



116



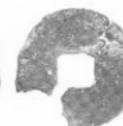
128



127



126



その他の遺物

ふりがな	まるやまいせき							
書名	まるやま遺跡							
副書名	本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	V							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第178冊							
編著者名	三原慎吾							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-0011 神戸市中央区下山手通り5丁目10-1 TEL 078-341-7711							
発行年月日	西暦1998(平成10)年 3月 20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まるやまいせき まるやま遺跡	ひょうごけん 兵庫県 つなぐん 津名郡 あわじちょう 淡路町 いわや 岩屋 713他	28682	920163	34 度 34 分 45 秒	135 度 01 分 00 秒	1994. 6.1 ~6.30	376m <sup>2</sup>	本州四国連絡道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
まるやま遺跡	集落	縄文時代 草創期	石器製作跡 (石器ブロック)	有舌尖頭器 木葉形尖頭器 搔器・削器類 楔形石器			サヌカイト原石採集可能地域での、縄文時代草創期の石器製作遺跡	

---

兵庫県文化財調査報告 第178冊

## まるやま遺跡

—本州西国進路道跡に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V—

1998(平成10)年3月20日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 TEL 078-531-7011  
神戸市兵庫区荒田2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-0011 TEL 078-341-7711  
神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 水山産業株式会社  
〒653-0012 TEL 078-577-3757(代)  
神戸市长田区二番町3丁目4-1

---